

# 家庭における父親の存在と役割について

## －動的家族画を用いて－

辻 佳奈子

(橋本 尚子ゼミ)

### 1. 父親の育児参加への要請の背景

戦後、日本では性別によって役割が異なるという考え方“性別役割分業”が一般化し、男性は外で働き賃金を得て、女性は家庭で家事や育児を担うという家族の在り方が定着した。当時の日本は高度経済成長期であったため、女性が専業主婦になることも可能であった。性別役割分業は、その後の高度経済成長を支えた。

世界的な影響を受け経済が一気に低迷した近年では女性の社会進出が推進されており、社会で活躍する女性が増えている。労働政策研究・研修機構のまとめたデータによると、1980年代半ばは専業主婦世帯が多かった。しかし、1980年代後半から徐々に共働き世帯が多くなり、1990年代後半以降は共働き世帯が専業主婦世帯を上回る。2016年の調査では、共働き世帯は1,129世帯、専業主婦世帯は664世帯と圧倒的に共働き世帯の方が多く、夫婦共に働くことは一般的になってきている。

夫婦共働き世帯の増加に伴い、以前根付いていた性別役割分業意識は薄れ、“家事や育児は夫婦で分担すべき”という新しい価値観へと変化が生じている。特に2010年は、その変化が顕著に表れた。家事や育児を積極的に行う父親を指す“イクメン”という言葉が流行語大賞を受賞。厚生労働省は2010年6月17日より男性の育児参加の社会的気運を高め、男女の「仕事と育児の両立」を支援することを目的として「イクメンプロジェクト」を開始した。

このように、さまざまな取り組みが父親の育児参加を目指して行われている。小崎(2017)は、父親が育児に積極的に参加する事が必要とされる背景には、社会全体の変革があるとし、それは次の7つに集約されると述べている。

### 1. 少子高齢化社会の危機感

少子高齢化は、企業の経営計画や経営戦略の変化という事象を生み出している。企業戦略の変化は、企業内で働く男性の関心事として取り扱われるようになり、そのことが男性の育児や少子化に対する関心度を上げた。

### 2. 母親を中心として「育てる側」の不安とその抑止

子育ての多くを母親が担っているのが現代の日本の現状である。子育ての加重な負担は、育児不安や育児ノイローゼという状況を生み出す。また、児童虐待の一因にもなりえる。

### 3. 子どもの育つ環境の劣悪さとその不安への対応

近年、少年事件は減少しているものの、その内容は凄惨・残虐さを増し、人々や社会の印象に残るものが多い。少年犯罪は加害者だけの問題ではなく、同時に少年が被害者となることや、少年が直接巻き込まれることもある。子どもたちが巻き込まれる可能性のある少年犯罪の印象が、父親にわが子の安全や地域社会へと目を向けさせている。

### 4. 男女共同参画化社会の到来

1999年の男女共同参画社会基本法の施行以降、男女共同参画の理念が浸透し、いわゆる「男性らしさ」「女性らしさ」と言われる「固定的役割分業」の緩和が起きている。この動きは職業領域だけでなく、教育分野でも起こっている。このような社会の転換の中で、人々の意識にも確実に変化が生じ、これまで女性の領域とされてきた子育てなどにも父親たちが積極的に関わりを求め、実際に育児に携わるようになってきた。

### 5. 企業の経営戦略と人材戦略

現在進行している人口減少はそのまま労働力の減少に繋がり、企業の根幹をなす「人材」が

足りないという状況が起きている。それと同時に、昨今「ブラック企業」などと比喻されてきた男性労働者の長時間労働、長時間通勤や、過労死、うつ自殺など命を投げ出してまで働き続ける姿がようやく問題視され始めた。

このような諸問題に対して、企業は「働き方改革」など、様々な対応策を打ち出している。また、政府は2005年に「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」「仕事と生活の調和推進のための行動指針」をそれぞれ打ち出し、その推進に努めている。企業がワーク・ライフ・バランスを志向することは、そこで働く父親自身を家族や子育てを含めた、企業人以外の生き方への転換を行ったといえる。

## 6. 共働き家庭の増加に伴う家庭内のバランスの維持

共働き家庭においては、女性の稼ぎが家計収入のある一定数を占めていることになり、「労働」という領域が決して男性のみの専売特許ではなくなる。母親の労働領域への進出は、家庭内の稼ぎ役割の分割を引き起こし、それに伴い家庭内家事・育児の分割も引き起こした。

## 7. 男性自身の家族志向への変化

いわゆるバブル時期において、男性は働くことだけに集中し、家族を顧みないことが多くあった。働いた分、給料の上昇や社会的地位の向上など、得られる利益も多かったこの時期、父親の幸福はすべて会社の中に存在したといえる。しかし、経済が低迷して以降、父親は会社という存在場所を失った。その事をきっかけに、父親は自らの生き方や存在、あるいはパートナー、子ども、家族といった生活や日常というものに意識を持ち始める。

社会的に変化は生じているものの、実態としては家事・育児の多くを母親が担っている。総務省統計局の行った調査によると、約20年前である平成8年、6歳未満の子どものいる世帯での一週間あたりの家事関連時間は、夫が38分（うち育児時間は18分）、妻は7時間38分（うち育児時間は2時間43分）であった。平成28年の調査では、

夫が1時間23分（うち育児時間は49分）、妻が7時間34分（うち育児時間は3時間45分）であった。夫の家事関連時間は増加しているものの、妻に比べるとまだまだ短い。また、平成28年度の育児休暇取得率は、女性が81.8%、男性が3.16%であった。「イケメンプロジェクト」開始以降緩やかに男性の育児休暇取得率が上昇しているものの、圧倒的に女性（母親）の育児休暇取得率の方が高い。

## 2. 父親の存在の希薄化

このように、働きながら家事や育児を担う母親が多い中、“父親の存在の希薄化”や“父親の不在”についての指摘が増えてきた。株式会社博報堂が行っている意識調査では、「父親尊敬派（どちらかという父親を尊敬している）」「母親尊敬派（どちらかという母親を尊敬している）」について、1997年の調査開始時は「父親尊敬派」が53.7%、「母親尊敬派」が46.4%と、「父親尊敬派」が優勢であった。しかし、ゆるやかな増減を経て2008年には「母親尊敬派」が優勢となり、2016年の調査では過去最高値の54.0%となった。母親尊敬派が父親尊敬派を初めて上回ったのである。

また、市川（2005）は小学生を対象に動的家族画（K-F-D）を行い、日比（1986）の被験者の多くは父親像を第1に描くという報告と比較し、近年では母親を第1に描く子どもが多い事を報告している。次いで自分、父親の順で描く児童が多い。江幡・吉田（2000）も自分、母親、弟の順に描画する子どもが多いと報告している。加藤（1986）によると、描画順には家庭内の日常的序列、家庭内の相対的重要度が表れる。これらの結果を踏まえると、昔の家庭内においては父親が優位に立ち、重要度も高かった。しかし、家庭内の序列が変化し、近年では母親や子どもの重要度や優位性が上がり、父親の存在が希薄化していることがわかる。

深谷（1995）は、父親像の希薄化や不在について指摘される場合、その根拠は3つに大別されると述べている。1. 家に父親が居ることがすくないという、実態としての物理的不在、2. 在宅時間の長短に関わらず、父親の権威や威厳がなくなってきたという、心理的な面での権威の喪失、3.

家制度を背景として、実態以上に誇張されたかつての父親像と対比するために感じる父親の存在感の薄さ。

深谷の指摘しているように、明治民法や社会的規範により権威を与えられていた父親が、外的な権威づけが弱くなった事により“生”の存在になったこと、労働時間が長く、家族と関わる時間が短いことなどが、父親像の希薄化や父親不在と言われる要因であるといえる。

また、青井（1974）は、父親の職場が家庭の外にあるので、子には父の仕事ぶりを見ることはできず、父親の方でも社会変動の激しい現在では、子の将来に具体的な忠告を与えてやる能力はない。一方で、母親の苦労だけは子にもよくわかっている。父は家ではむしろ、「よそのもの」なのである。元来、男性は女性ほど家庭生活の訓練を受けておらず、夫と父の役割の間には大きな断層があると述べている。

青井の指摘は今より43年前であり、当時とは社会の在り方や価値観に大きな変化が生じている。しかし、現代においても父親の仕事ぶりを子どもは見ることができず、父は子に具体的な忠告ができないことに変わりない。その事も父親の存在の希薄化に一因になっているのではないか。

### 3. いかにして親になるのか

母親はお腹の中で子どもが大きくなっていく感覚や、出産を経験する事により、“母親意識”が芽生えやすいといえる。出産を経験せず、子どもが誕生した実感を得にくい父親は、どのようにして父親意識を芽生えさせ、どのようにして父親になっていくのかは一つの大きなテーマとしても考えられる。

Greenberg（1974）は、夫（父親）が出産に立ち会う事により、エングロスメント（engrossment：のめり込み、没入感情）が生まれる事を報告した。出産に立ち会う事はエングロスメントを触発するのに有意義であり、エングロスメントを持った父親は子どもの成長発達と共に関わりを持ち続け、そのような父親は家庭内での価値と自尊心が高まったように感じるという結果を報告している。（蛭田、2000）子どもの誕生を体感しにくい父親は、

初期の段階から妻に寄り添い、子どもの誕生を実際に目にする事で父親意識が芽生えやすく、その後の育児への参加意欲も高くなるといえる。

しかし、現代では「父親も積極的に育児に参加しよう」という方向に社会が動いているものの、その強制力は弱い。つまり、父親が育児に参加するには、父親が主体性をもって行動する事が必要であるといえる。その難しさを現代という時代に照らして考えてみると、以下のような状況がある。

河合・田中（2016）は、従来では社会構造や生き方が定型であったために主体性の弱さが目立たなかったが、それが緩んでくるに伴って、主体性の弱い人が定型的な発達からずれやすくなり、結果として発達の「非定型化」が頻発していることを指摘している。これは家族それぞれのあり方に影響している。個人の自由度が増した現代では、ある年齢で達成すべき発達課題が曖昧になっていく。そのことが親子の分離を難しくさせ、結果として個としての主体が確立されないことにつながっている。また、現代では世代間の差が小さくなって世代間の葛藤はなくなり、親や上の世代に対して自分を主張する必要もなくなってきた。また行うべきことや生き方のルールが徹底されていないため、固定した社会構造や社会的要請に対しての葛藤が生じにくい。このような構造のなさは家庭内でも見られるようになり、家族間でのぶつかり合いや葛藤もなくなってきたと言う。

このような状況の中で、父親自身が父親としてのモデルそのものを見出しにくく、いかにすれば父親らしいのか、父親であるとはどういうことかがますますわかりにくくなっているといえるのではないか。そして父親モデルがないために、父親とはどうあるべきかは、個々の個人に任される面があり、過去にはない難しさが生まれてきているとも言えるであろう。

井上（1988）は、「人間はだれしもわが子をさずかってはじめて、『母親である』ことができ、『父親である』ことができる。つまり、『親である』ことは、実子であれ養子であれ、わが子との関係（間柄）において、はじめて成り立ちうるのである。しかし、それだけではかならずしも『親になる』ことはできない。家庭におけるわが子とのふ

だんの相互作用のプロセスで、知らずしらずのうちに、親らしくさせられてゆくと述べている。工藤 (2016) も、「父親は育児をすることで、父親になる。子どもが0歳であるのと同時に、親の方も親0歳なのである」と述べている。親が“親となる”には積極的に育児に関わり、様々な情報を得つつ実践経験を持つこと必要があることがわかる。

「積極的に育児に参加しましょう」と社会から促されている父親とは異なり、母親は出産からの流れで、必然的に育児を担うことが多い。井上、工藤の述べているように、母親も子どもが生まれた時には親0歳で、実際に育児に携わり、周囲の力を借りつつ、試行錯誤を繰り返し母親になっていく。父親が父親となってゆくには、妊娠初期の頃から妻に寄り添い、積極的に育児に携わっていくことが大切である。

庭野 (2007) は、多くの父親が長時間労働を理由に育児に参加できないという現状があるが、「働きながら育児をする父親モデル」に出会う事で、「自分にもできそうだ」という見通しを持つことができれば、徐々に育児に向かわせる効果があることを報告している。働き方改革や男性の育児休暇取得を社会的に促しているものの、実態としてはまだまだ普及していない。社会全体が変革するには長い年月がかかるため、積極的に父親同士が交流を行い、実際に働きながら育児に参加している父親と対話する事で男性の育児参加がもっと促されるのではないか。

#### 4. 動的家族画 (KFD) について

被験者の内的な家族イメージについて知る方法の一つとして、家族画 (Drawing A Family, D-A-F) がある。D-A-Fとは投影法の一つで、被験者の家族全員を一枚の用紙に描かせる方法である。このD-A-Fを発展させたものが動的家族画である。日比 (1986) によると Burns と Kaufman は、彼らの患児に対して、動的教示、すなわち家族が何らかの行為、もしくは動作を行っているところを描くように求められることによって、11年の間に収集した、およそ10,000枚の動的な家族画から、新しい一つの投影法を確立した。すなわち、これが動的家族画法 (Kinetic Family Draw,

K-F-D) である。D-A-Fは、その教示 (instruction) も、得られる結果としての描画も、ともに静的なものであり極めて非動的 (akinetik) である。しかしながら、これらの描画に対して何らかの運動性、すなわち動的 (kinetic) 要素が加味されるならば、得られる情報の質と量が飛躍的に増加するし、多くの意義ある臨床的知見を獲得することができる。O'Brien と Patton (1974) は、描かれる人物像の行為の活動性の度合いや、家族関係の様相から K-F-D の客観的評価が成立し、加えて描画から不安、自己概念、攻撃的行動や逃避的行動などが予測できるとしている。

日本においては、日比が児童臨床における家族療法との関連のもとに K-F-D を紹介し (日比、1973)、続いて了解心理学 (understanding psychology) 的観点から、自我同一性 (ego-stability) が K-F-D に投影されること (日比、1974 a)、および、自己の性役割への同一化 (sex-role identification) の発達的变化が推計学的に実証されること (日比、1975 b) など、一連の研究を報告している。また、清水 (1974) は K-F-D と他の人物描画との比較検討を行った。加藤ら (1975) は、Burns と Kaufman の 2 冊目の著書 (1972) の訳出を行うとともに、本邦児童について一連の研究を発表し (加藤・伊倉・久保、1976、加藤・清水、1977、1978)、そして石川 (1982、1983) は家族療法との関連の下に、その労作を公刊している。(日比、1986)

K-F-D を用いて母親やこどもの視点から家族について研究したものは数多くあるものの、父親からの視点で家族について研究されたものはまだまだ少ない。本研究では、K-F-D とアンケート調査、簡単な SCT を用いて、父親はどの程度家族に関わっているのか、父親が自分の家族について、家族での自分の存在についてどのように認知しているのかについて研究し、今後の“家族の在り方”“父親の存在・役割”について検討していく。

### 調査方法

#### 調査協力者

滋賀県内に在住している、現在小学生の子どもがいる父親と、京都府内に在住し、放課後等デイ

家庭における父親の存在と役割について－動的家族画を用いて－

サービスを利用している子どもの父親を対象に行った。

配布時期 2017年11月7日～2017年12月26日

配布人数 22人、回収人数12人（アンケート調査のみは3人）であった。回収率は54%。

## 調査内容

### 1) 動的家族描画法 (K-F-D)

通常、K-F-Dは一对一で行うことが望ましいが、絵を描いている姿を見られたくないと感じる調査協力者が多かったため、教示とA4の用紙を封筒に入れ手渡し、後日回収した。

協力が得られた滋賀県在住の父親に、筆者が直接会う事は困難であったため、第三者（筆者の知人）から封筒を渡した。結果の回収は第三者を通して行った。また、放課後等デイサービス利用者の母親に封筒を渡し、帰宅してから夫（父親）に渡すよう依頼した。その際、結果の回収は母親を通して行った。

描画に用いる用具は2B～HBの鉛筆が好ましいが、用意するのが困難な場合はシャープペンシルを使用することを許可した。

教示は次のように行った。「同封しているA4画用紙に、あなたを含めて、あなたの家族みんなについて、何かしているところを絵に描いてください。描いた人物の横に、「何番目にその人を描いたか」「その人は誰なのか」「何をしているところなのか」を記入してください。」

描画前に調査者に質問ができないため、質問されると予測する内容（消しゴムを使って良いか、色を塗る必要はあるか等）について、「注意点」という項目を作って明記した。また、「これはあなたの絵のうまさを評価するものではありませんので、安心して、自由に家族の絵を描いてください。」と、自由に家族の絵を描いて良いことを強調した。

### 2) アンケート調査と文章完成法

K-F-Dとの関連を調べるため、教示と共にアンケート調査を同封した。内容は①「家族構成」②「子どもとの交流の時間」③「普段、子どもと積極的にコミュニケーションが取れ

ていると感じているか」「（取れていないと感じている人はその理由）」④「家族（子ども）とコミュニケーションを取るために心がけている事はあるか。」⑤「日頃、家族や子どもとのコミュニケーションについて感じていること」について自由に記入する項目を設けた。

### 文章完成法

調査協力者の両親について“父親観”“母親観”について知るため、文章完成法を入れた。完成する文章は7つである。「1. 私の父は\_\_\_\_でした。」「2. 私の母は\_\_\_\_でした。」「3. 父として\_\_\_\_。」「4. 私の理想とする父親とは、\_\_\_\_である。」「5. 私の理想とする母親とは、\_\_\_\_である。」「6. 妻は\_\_\_\_。」「7. 私は子どもに\_\_\_\_。」

## 結果と考察

得られた結果について、下記に示す。無記入の箇所は空白とした。事例1～8は描画あり、事例9～12はアンケートのみである。自由記述4、5については各事例ごとに記載した。

表1 家族構成

① 家族構成	
自分、妻、子（2人）、 祖父母	事例1・2
自分、妻、子（2人）	事例3・4・7・10・12
自分、妻、子	事例5・11

表2 子どもとの交流時間

② 子どもとの交流時間	
平日	休日
1時間以下…事例1・3・ 5・7・9・10・12	3時間…事例1・3・4・ 5・6・8・11
2時間…事例4・11	4時間以上…事例2・7・ 9・10
4時間以上…事例2	

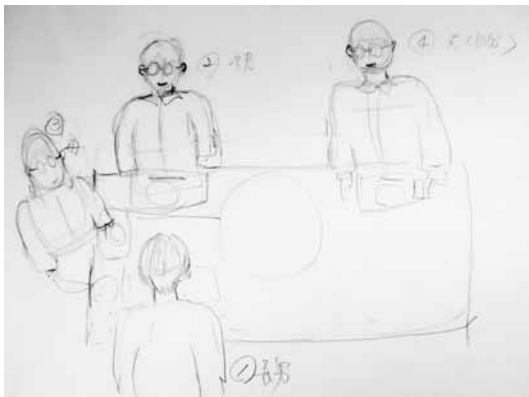
表3 普段、家族や子どもとコミュニケーションが取れていると感じているか

④ 普段、家族や子どもとコミュニケーションが取れていると感じているか
取れている…事例2・8・9・11
取れていない…事例1・3・7 (理由: 仕事が忙しいから) 5・6 (理由: その他) ・4 (子どもも友達と遊ぶ時間が多い。あとはゲーム) 10 (妻と子どもの接する時間の方が長い)

表4 KFDの描画順と表情の有無

KFDの描画順と表情の有無	
自分、妻、子ども…事例3・5・6 (表情なし)	妻、自分、子ども…事例4 (表情あり)
子ども、妻、自分…事例1・2・8 (表情あり)	犬、自分、妻、子ども…事例7 (表情あり)

## 1. &lt;事例1&gt;



事例1の描画

## &lt;事例1. アンケートの自由記述&gt;

④「休日は一緒に食事する、家庭菜園など一緒に行く」⑤「休日は子どもに接し、家事など一緒に取り組み、子どもと一緒に居る時間を多く持つ」

## &lt;事例1. SCT&gt;

1. 私の父は頑固者の大工でした。2. 私の母は子ども4人を立派に育てた母親でした。3. 父としていつも近くに居る存在でいたい。4. 私の理想とする父親とは何でも話せる父親である。5. 私の理想とする母親とは温かい人である。6. 妻は子どもたちを温かく見守ってもらいたい。7. 私は子どもにしっかりと地に足を付け、人生を歩んでももらいたい。

表5 事例1の描画考察

人物の位置	対面する子どもたちの間に居るように妻が描かれている。妻の体は長男の方を向いているようである。自己像は次男と並ぶように、3人から少し離れた位置にいる。机を表していると思われる四角を中心とし、その周囲に家族が座っている。自分（父親）と次男が高く、一番に描かれた長男は下位に居る。
人物像の特徴	男女の区別や個人の区別がつきにくい。父親は食卓に手をのせているが、他の家族の手は省略されている。次男と父親は似たような襟のついた服を着ている。
表情	妻、次男、自分は口角が上がっており、笑っているように見える。3人とも眼鏡をかけているため本当の表情はわからないが、眼鏡の傾き加減から次男は母親（妻）の方を、自分（父親）は次男の方を向いているように感じる。長男は後ろ姿が描かれており、どのような表情をしているのかわからない。
行為内容	タイトルや説明が無く、被験者がどのような場面を描いたのか正確にはわからないが、お皿や箸のようなものが描かれていることから「食事をしている風景」とであると考える。
人物間の交流	笑っているような表情から楽しそうな雰囲気は感じられるが、家族みんなで食事を楽しんでいるように感じられない。家族の口は閉じられており、盛んな交流は見られない。
用紙の使い方と筆圧	用紙いっぱい描かれているが、筆圧は薄く、軽いタッチで何度も重ねるように描かれている。自分と次男の耳、口だけは他より濃いように感じる。

### <事例1. 全体考察>

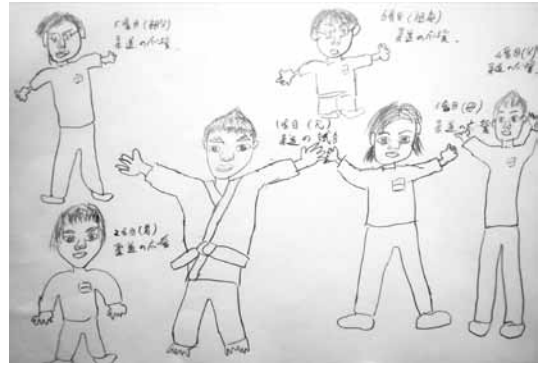
自己像と横並びに描かれた次男は自己像と同じような姿をしている。反対に長男は用紙の下位に後ろ姿で描かれている。このことから、父親は長男に対して何等かの否定的感情や、コミュニケーションの取りづらさを感じているのではないかと推測する。反対に、長男が父親に対して反抗心をもっており、拒否的反応を示す事から、父親が長男をこのように表現したと解釈する事もできる。

回収したK-F-Dの中で唯一、この描画には人物の省略があった。両親が同居しているが、描画には祖父母の姿は描かれていない。同居はしているものの、父親のイメージする家族は自分、母親、長男、次男で構成されているのかもしれない。また、K-F-Dを行う前にアンケート調査に回答している可能性が高く、その内容は子どもや妻に関する内容であったため、描画の結果に影響を与えなかったとは言い切れない。

また、この父親は自己像を他の家族と少し離れたところに描いている。アンケートの回答を見ると、「あまりコミュニケーションが取れていない」と感じている。このことから、父親は心理的に家族との距離を感じているのではないかと推測する。本人はコミュニケーションが取れていないと感じているものの、コミュニケーションを取る

ために意識している事や心がけている事はとても具体的である。SCTの結果をみると、明確な父親・母親像や子どもにも望んでいることが伝わってくる。

### 2. <事例2>



事例2の描画

### <事例2. アンケートの自由記述>

④「会話・一緒に遊ぶ・一緒に食事を取る・一緒にお風呂に入る(話を聞く)」⑤「話の組み立て方、話す言葉を選ぶ事で本当にお互いその話題について理解できているかいないかが変わってくると思うので、なるべく本当に理解しあえるように時間をかけたり言葉を選んだりしている。」

表6 事例2の描画考察

人物の位置	個々人は対面しておらず、全員正面を向いている。用紙の中心あたりには長男が大きく描かれている。長男と母親は手が触れ合いそうなほど近いが、次男は両親から遠く、祖父と一番近い。高い位置に祖父母、一番下位に次男が描かれている。自分像は用紙の端に、しっかりと描かれた妻に圧倒されるように細長く描かれている。子どもとは距離が遠い。
人物像の特徴	家族はみんな手を水平かそれ以上に挙げており、一体感を感じる。唯一次男だけが手を下げている。柔道の試合を行っている長男以外、家族は同じ衣服を着用している。
表情	全員、顔がしっかりと描かれている。長男の眉毛は三角、次男の眉毛は楕円形、母親(妻)の眉毛はキリッとした一本線など一人ひとりの特徴が細かく表現されている。笑っているようには感じられないが、一人ひとりが生き生きとしている印象を受ける。
行為内容	長男が柔道の試合中で、その他の家族が応援しているところ。
人物間の交流	長男以外は同じ「長男の柔道の試合の応援」をしているが、人物間の交流は感じられない。
用紙の使い方と筆圧	用紙全体に、濃い筆圧で堂々と描かれている。描かれる線に迷いなく、一直線である。人物一人ひとりの存在感が強い。

### <事例2. SCT >

1. 私の父は勉強をよくする人でした。2. 私の母は子育てをよくする人でした。3. 父として家庭の調和を大切にする。4. 私の理想とする父親とは家族に対して思いやりのある人である。5. 私の理想とする母親とは子どもの事を一生懸命考える人である。6. 妻は家庭を明るくつつみ込む。7. 私は子どもに可能性のある事は挑戦してもらいたい。

#### <事例2. 全体考察>

線の濃さや太さから力強さや家族像の力動性を感じる。この父親はアンケートでも回答しているように、家族と親密なコミュニケーションが取れているようである。このことは、家族の服装や手を挙げている動作が同じであることから伺える。人物間の交流はあまり感じられないものの、家族の一体感が強い。

最初に、中心に大きく長男を描いた事からこの父親の一番の関心は長男に向けられている事がわかる。長男は、手が触れ合いそうなほど母親に近く描かれているため、子どもの世話をを行い、心理的に距離が近いのは母親であると推測できる。

日頃コミュニケーションを取るために心掛けている事は具体的であり、子どもと接する時間も長く、家族と主体的にコミュニケーションと取っている事がわかる。この父親も、SCTの結果から、

明確な父親・母親像や子どもに対する思いを持っている事がわかる。

### 3. <事例3 >



事例3の描画

#### <事例3. アンケートの自由記述>

④「なかなかコミュニケーションがとれていないのでとっていきたい」

表7 事例3の描画考察

人物の位置	家族4人が向かいあうように描かれている。父親と母親、長女と長男が横並びに座っている。長男と父親、長女と母親が対面しているようにも見える。横並びに描かれた兄弟は距離が近いのに対し、両親の距離は少し離れている。子どもたちは両親より高い位置に描かれている。
人物像の特徴	胴から飛び出たように手が伸びている。子どもたちと母親は足の描画がされているが、自分（父親）の足の描画は曖昧である。
表情	子どもたちの表情は無く、空白のままである。両親は後ろを向いており、どのような表情をしているのかわからない。両親は自分の手札を見ているようにも見える。
行為内容	トランプ（ババ抜き）をしているところ。ババ抜きという勝ち負けのハッキリしている遊びをしているのが印象的である。
人物間の交流	トランプという媒介物を通して交流している場面であるが、あまり活発な交流は感じられない。
用紙の使い方と筆圧	用紙の中心に大きく家族像が描かれているが、その線は薄く、途切れとぎれである。自己像は特に薄く、線は震えており、途切れている箇所が多い。子どもたちの腕を見ると、胴が透けているようである。



### <事例3. SCT >

1. 私の父はやさしい人でした。2. 私の母は明るい人でした。3. 父として家族を守る。4. 私の理想とする父親とは家族を幸せにできる人である。5. 私の理想とする母親とは家族を幸せにできる人である。6. 妻は子どもを愛している。7. 私は子どもにきびしい。

#### <事例3. 全体考察>

子どもたちの表情は描かれておらず、両親は後ろ姿が描かれているのが特徴的である。夫婦のコミュニケーションの取りづらさや不安定さから、両親は後ろ姿が描かれ、子どもたちの表情を描くに至らなかったのではないか。

今にも消えそうな自己像は、家庭内での父親の存在の希薄さを表していると解釈できる。「なかなかコミュニケーションが取れていないのどっていきたい」と考えつつ、家族とコミュニケーションを取る事について無意識的に否定的な感情を抱いており、それが描画に投影された可能性もある。アンケートに記述している通り、仕事の忙しさも家族や子どもとのコミュニケーションの希薄化に繋がっているといえる。

K-F-Dからは、父親の持つ家族イメージを強く感じられることはなかった。また、SCTの結果を見ても、単語での回答が多く、個人の持っている価値観や父親・母親像が明確に読み取れない。

表8 事例4の描画考察

人物の位置	描画順のように、妻が一番高い位置に描かれている。次いで自分、長男、一番下位に描かれているのは長女である。自分の近くには妻がおり、子どもたちとは対面している。
人物像の特徴	人物像が小さい。両親は手を前へ、子どもたちは手を横に伸ばしている。
表情	全員しっかりと表情が描かれている。口角が上がっており、楽しそうな表情をしている。子どもたちは口を開けているが、両親は口を閉ざしている。
行為内容	サッカーをしていて子どもが蹴るボールを夫婦で受け止める場面。通常サッカーは一つのボールを用いて行すが、子ども一人ひとりの前にボールがあり、蹴ろうとしている。両親は子どもたちの蹴るボールを受け止めるように、手を前に出している。
人物間の交流	家族全体で交流しているというよりも、妻(母)と長男、自分(父親)と長女が対峙していることから、何かしらの交流しているように感じる。
用紙の使い方と筆圧	用紙の下方、左寄りに描かれている。人物像は小さいが、その線は濃くしっかりと描かれている。迷いなく描かれているようである。一本一本はハッキリとしているが、つなぎ目が途切れている箇所もある。

### 4. <事例4 >



事例4の描画

#### <事例4. アンケートの自由記述>

④「ゲームばかりやっているの外に連れ出して色々な経験をさせてあげたいです。かつて自分も父親にはそうしてもらったので。」

#### <事例4. SCT >

1. 私の父は真面目で私にも優しく、そして厳しい人でした。2. 私の母は自分の事より私たち子どもを優先する人でした。3. 父として昔は反発ばかりしていたが今は尊敬できる人。4. 私の理想とする父親とは自分の父親のような存在である。5. 私の理想とする母親は自分の母親のような存在である。6. 妻は空気のように当たり前のようについて、なくては困る存在。7. 私は子どもに父親であり、同じ目線で話せる存在でありたい。

#### <事例4. 全体考察>

長男の前に妻、長女の前に自分（父親）と異性の親子が対面している。子どもたちは今、両親からの自立の時期に差しかかっているのかもしれない。一人ひとりが蹴るボールが、異性の親に対する攻撃や反抗心を表しているならば、両親は子どもたちの意思表示を正面から受け止めようとしている姿勢がうかがえる。表情がにこやかであるため、家族間の不和は感じられない。

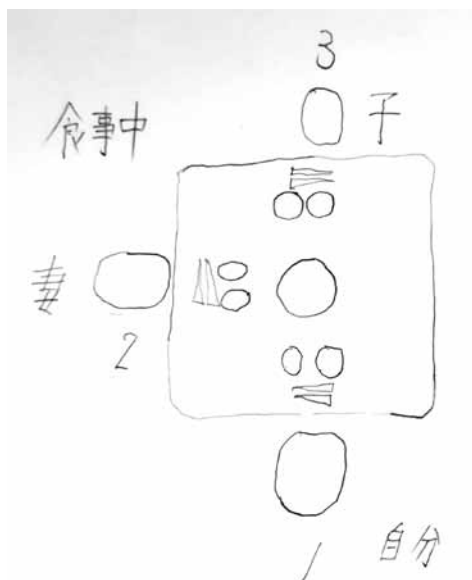
最初に妻が描かれ、自己像が一番近い事から、父親の中の家庭内序列は妻が上位で、心理的にも距離が近いのではないかと考えられる。一方、子どもとは対峙しており、距離も遠い。積極的にかかわりたい気持ちは持っているものの、どのようにコミュニケーションを取ったらいいのかわからないのではないかと考える。アンケートでは、子どもも友達と遊ぶ事や、ゲームをすることが多いと回答している。

この父親は自分の両親を尊敬し、両親から親モデルを取り込んでいる。時代の流れから子どもたちはゲームに熱中する事が多いが、自身の持つ明確な父親モデルを基に、子育てに対して積極的に参加しようとしている姿勢が伝わる。

表9 事例5の描画考察

人物の位置	四角い食卓を囲むように、家族像が描かれている。用紙の上部に子ども、下部に自分がいる。2人が対面しているようにも見える。
人物像の特徴	“人物像”というよりも、“記号”という印象を受ける。机や箸、お皿も四角や三角、丸で表現されている。
表情	表情は無く、空白である。
行為内容	「食事中」
人物間の交流	家族みんなで食事をしている場面を描いたものであるが、人物間の活発な交流は感じられない。
用紙の使い方と筆圧	用紙の中心に、小さめに家族が描かれている。線は何かの図形を書いたように正確である。恐らくシャープペンシルを用いて描画されたため、線は細いが濃い。
その他	家族全体を俯瞰したように描かれている。

#### 5. <事例5>



事例5の描画

#### <事例5. アンケートの自由記述>

④「つまらないことでも話をもちかける」。

#### <事例5. SCT >

1. 私の父はサポートしてくれる人でした。2. 私の母はアドバイスしてくれる人でした。3. 父として手本を見せる。4. 私の理想とする父親とは頼れる、厳しい、尊敬できる行動力と力である。5. 私の理想とする母親とは時には厳しく、時に優しく、優しく話を聞いてあげる人である。6. 妻はお互い支えあう。7. 私は子どもに。

## ＜事例5. 全体考察＞

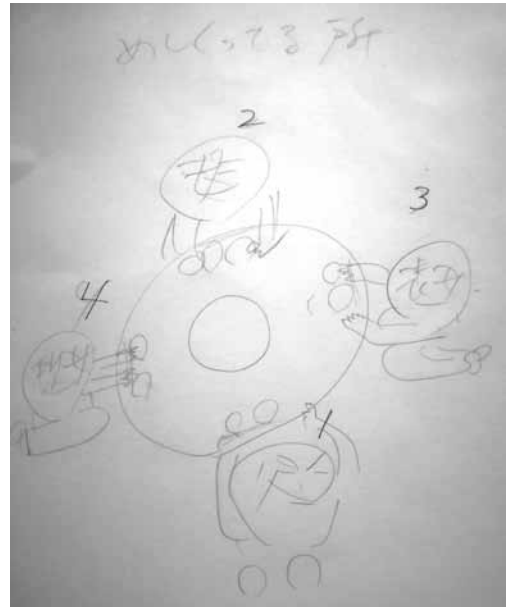
SCTの7が空白であったが、記入できなかった、あるいは、しなかったというよりも、SCTの6以降がすべて空白であったため記入漏れであったと推測する。描画は、絵というよりも何かの図面のような印象を受ける。家族が記号で表され、活発な交流や力動性も感じられない。線や記号の形はとても正確である。このK-F-Dは、父親のパソナリティーが強く反映されていると推測する。

最初に自分を描いているが、用紙の下部に位置している。対して、最後に描かれた子どもが一番上部に描かれており、父親の真上に描かれている。自分自身への関心が高い一方で、家庭内での中心、リーダー的存在は子どもである事を投影しているのではないか。

SCTの結果を見ると、刺激文に対して繋がらない文章を書いている事もある。家族像や価値観については抽象的な文章が多く、明確にこの父親の持つ家族像や価値観を感じることはできない。育児では、子どもの身体的な世話だけでなく、食事中に会話をする、キャッチボールをして遊ぶなかで、情緒的な交流を持つことも重要である。記号で家族を表したこの父親が構造化された環境を

好み、人と情緒的な交流をすることが苦手であると仮定するならば、子どもと心理的に距離を縮める事や、柔軟な対応が求められ、これといった正解のない子育てをととても難しい事を感じているかもしれない。

## 6. ＜事例6＞



事例6の描画

表10 事例6の描画考察

人物の位置	父が一番下位に、母親は上位に描かれている。母親と父親、長女と次女が対面している。机を表している丸を囲むように家族が座っている。
人物像の特徴	丸の中に「母」「長女」などの文字を描き、家族を表している。頭、手、足、表情と一つ一つが繋がっていない印象を受ける。特に自己像は空白が多く、右手と足は胴体に繋がっていない。
表情	文字に隠れており読み取りにくいですが、子どもたちにはこやかな笑顔を、母親は柔かな笑顔を浮かべている。3人とも口は閉じている。対して父親は眉毛の吊り上がった、怒ったような表情をしており、口は一文字に固く閉ざされている。母と子どもたちは丸の中心に描かれている。子どもたちは体が横向きなのに対し、顔は正面を向いている。父親の体も妻（母）の方を向いているのにも関わらず、顔は正面を向いており、丸（輪郭）に対してやや右側に描かれている。
行為内容	「めしくってる所」
人物間の交流	人物像の力動性や交流はあまり感じられない。食事をしている風景であるが、食事をしている様子はいかがえない。
用紙の使い方と筆圧	用紙のやや上方寄りに大きく家族が描かれている。筆圧が薄く、線も途切れている。あまり時間をかけず、走るように描いたような線。力動性や活発な印象は受けない。

### <事例6. SCT >

1. 私の父は人でした。2. 私の母は人でした。3. 父としてがんばろう。4. 私の理想とする父親とはえがおである。5. 私の理想とする母親とはやさしさである。6. 妻は受容。7. 私は子どもに何を残せる。

### <事例6. 全体考察>

人物の顔（表情）の上に文字が記入されているが、「その人は誰なのかを記入してください」と教示したためであると思われる。多くの父親が人物像の近くに記入していたのに対し、この父親は人物像の中に文字を書き、その人物は誰であるのかを表した。丸の中心に“父”という文字が書かれ、後から文字の横に表情が描かれたようにも見える。

自己像だけが厳しい表情をしており、家族と楽しく交流している様子はみられない。また、家族全員の表情は描かれているものの、取ってつけたような表情で、その人の本当の表情という感じは受けない。これらの描画の特徴や、人物像にそれぞれの特徴が見られず、手や頭などのパーツがしっかりと繋がっていないことから、父親の中にある家族イメージの薄さがうかがえる。

未記入の箇所が多いため詳細は不明であるが、家族とコミュニケーションを積極的に取ろうとしている姿勢はあまり見られず、K-F-Dの結果を見ても家族間の活発な交流は見られない。SCTの結果は刺激文に対して単語が続く事が多く、自分の両親に関しては“人”であると表現している。刺激文とつながらない単語を繋げていたり、走るような線で描画したりしている事からあまり調査に集中していない様子がうかがえる。

### 7. <事例7 >



事例7の描画

### <事例7. アンケートの自由記述>

⑤「昔と違って色々なコミュニケーションツールが増えているので、今のコミュニケーションが合っているのかわからない」

### <事例7. SCT >

1. 私の父は何でもできる、器用な人でした。2. 私の母はおうらかでやさしい性格でした。3. 父として見本になれるようになりたい。4. 私の理想とする父親とは自分の父親である。5. 私の理想とする母親とは自分の母親である。6. 妻は行動派である。7. 私は子どもに癒されている。

### <事例7. 全体考察>

父親の中で、家族の交流といえは犬の散歩なの

表11 事例7の描画考察

人物の位置	犬を先頭に、家族が一行に並んでいる。父親が一番大きく、高い位置に居る。
人物像の特徴	父親は犬のリードを持ち、もう片方の手は前に振られている。人物間の距離は近く、手足が重なっているところもある。
表情	全員の表情がしっかりと描かれている。口角が上がっており、楽しそうである。
行為内容	「犬の散歩」
人物間の交流	交流はあまり感じられない。犬の散歩をする父親に家族がついてきているようである。
用紙の使い方と筆圧	用紙全体に大きく家族が描かれているが筆圧が弱く、線は何度も重ねるように描かれている。細部はあまりこだわらず、全体的に軽く描かれている。

## 家庭における父親の存在と役割について－動的家族画を用いて－

かもしれない。いつも父親がリードを持ち先頭を歩いているならば、この描画は現実的な風景をそのまま表していると推測できる。しかし、父親の内的な家族イメージを投影しているのであれば、愛犬や妻への関心は高く、心理的距離は近いが、反対に子どもへの関心や心理的距離は遠いと解釈できる。何重にも線を重ねて描画する様子から、内向的で控え目な性格を持ち合わせている反面、第一に誰よりも大きく自己像を描き、その自己像は手足など細部までしっかり描かれているため、父親の家庭内での一番の関心は自分に向いているのではないか。縦の用紙に家族全員を描くため、必然的に人物像が重なって描かれたのかもしれないが、他のK-F-Dに比べると人物間の距離は近く、家族の親密性の高さが伺える。

この父親も自分の両親を親モデルとし、積極的に家族や子どもとコミュニケーションを取ろうとしている姿勢がうかがえる。そのため、時代が変化する中で、子どもとのコミュニケーションの取り方について迷いを感じているのではないかと考える。

## 8. &lt;事例8&gt;



事例8の描画

<事例8. アンケートの自由記述>

⑤「どちらかというあまり表現しないタイプなので、自分の思いや感情がうまく伝わっていないと思います。しっかりコミュニケーションを取ろうとしたいです。」

<事例8. SCT >

1. 私の父は無口で多くは語らない人でした。
2. 私の母は子どもの事を常に思っていて動いてくれる人でした。
3. 父としてもっとたくさん子どもと会話しないとイケない。
4. 私の理想とする父親とはやさしくも、厳しくしないときにはできる人でした。
5. 私の理想とする母親とは厳しくも、子どもたちに好かれる人である。
6. 妻は子どものこ

表12 事例8の描画考察

人物の位置	最初に描かれた次女が中心に、姉妹は机の前に横並びに描かれている。母親は子どもたちを見守るように背面にえがかれており、体全体は見えない。家族の中で一番高い位置に居る。自己像は家族みんなを見ているように、横顔のみである。三女が一番両親に近い。
人物像の特徴	子どもたちは上半身に動きがあり、細かく描かれているが、下半身は机を表している線に隠れて見えない。父親、母親は子どもたちを囲むように、宙に浮いているように描かれ、体は見えない。
表情	父親の表情は見えないが、その他はみんなにこやかに、題名通りにぎやかで楽しそうである。母親は微笑んでいるが、子どもたちは口を開いて話をしているようである。
行為内容	「ワイワイとにぎやかにお昼ご飯を食べているところ」
人物間の交流	長女は次女の頭をなで、三女は次女の方を向いて何か話をしているようである。「食事をする」という行為を通して家族の交流が行われている様子が見えがえる。
用紙の使い方と筆圧	用紙全体に、濃い筆圧で描かれている。線が途切れている箇所もあるが、全体的に力強さを感じる。

とをしっかりと考えて行動してくれている。7. 私は子どもにたくさんのお話を伝えることができているかも。

#### <事例 8. 全体考察>

「ワイワイとにぎやかにお昼ご飯を食べているところ」というタイトルの通り、とても具体的に家族の交流の場面が表現されている。子どもと接する時間は平日1時間以下、休日3時間とあまり長くはない。アンケートの枠外には、「べったりしているとするとそれほど長く接することはできていません」と記入していた。しかし、子どもとしっかりコミュニケーションが取れていると感じており、描画からも和気あいあいとした家族の交流が感じられる。用紙いっぱいのにびのびと描画されており、その線ははっきりと濃く、人物間の距離も近い。表情はみんなニコニコとしている。母親は子どもを見守るように描かれており、中心にいる子どもたちはとても楽しそうである。

自分以外の家族については詳細に描かれているものの、自分像は表情や行為がわかりにくく、家族のことを机を隔てた向かいから眺めているようである。この描画様式から、この父親は家族の輪の中にどっしりと存在するというよりも、少し距離を置いて家族の様子を見守っている存在であると考察する。

活発な交流が感じられ、自身も「しっかりとコミュニケーションが取れている」と感じている一方で、アンケートやSCTではもっと子どもとコミュニケーションを取らないといけないという反省もみられた。

#### <事例 9 >

##### < SCT >

1. 私の父は仕事が忙しいでした。2. 私の母はいつも身近にいました。3. 父として厳しく育てる。4. 私の理想とする父親とは子どもを導く存在である。5. 私の理想とする母親とは子どもに優しさを教える存在である。6. 妻は子どもに甘く、夫に厳しい。7. 私は子どもに一人で生き抜く強さを教えたい。

#### <事例 10 >

##### < アンケートの自由記述 >

④「1日の出来事を聞くように心がけている。」

⑤「子どもはスマホに夢中で、妻はアイドルのおっかけに夢中、お互いに好きな事ばかりしている。」

##### < SCT >

1. 私の父は自営業でした。2. 私の母は死別していませんでした。3. 父としてわかりません。4. 私の理想とする父親とは西田敏行である。6. 妻は背が低くておっちょこちょい。7. 私は子どもに精一杯の愛情を注いでいる。

#### <事例 11 >

##### < SCT >

1. 私の父は子どもと遊ぶのが好きでした。2. 私の母は料理が好きでした。3. 父として4. 私の理想とする父親は子どもの手本になりたい。5. 私の理想とする母親は6. 妻は7. 私は子どもに

#### <事例 12 >

##### < アンケートの自由記述 >

④「お出かけをする」⑤「特にないです。自然のまま。」

##### < SCT >

1. 私の父はお酒好きでした。2. 私の母は苦勞人でした。3. 父として常に勉強しています。4. 私の理想とする父親は5. 私の理想とする母親は6. 妻は7. 私は子どもに甘々です。

## まとめ

序章にて、父親が父親となるには、妻の妊娠初期から寄り添い、主体性をもって育児に参加する事が必要であると述べた。今回の調査で、多くの父親が家族や子どもとコミュニケーションを取らなければいけないと感じていることが分かった。中には、意識的にコミュニケーションを取る時間を作る、話の仕方を工夫するなど、具体的な方法で子どもとコミュニケーションをとっている父親もいた。しかし、多くの父親が実際にはあまりコミュニケーションが取れていないようである。このことはアンケートの回答からも、描画からもうかがえた。描画では、自分像を1番に描いた父親

は8人中3人、2番目に描いたのは2人、合計で5人と多数であり、描画は力動性の感じられない静かなものが多かった。表情の描かれていないものや家族一人ひとりの特徴が見られないことも共通している。データが少ないため、今後データを増やして検討すべきだが、このことから、自分像から描く父親は、家族とのコミュニケーションが希薄であり、家族一人ひとりの具体的なイメージが浮かばないのではないかと推測される。アンケートの回答と照らし合わせてみても、自己像から描き始める父親は共通して家族とのコミュニケーションが取れていないと感じていた。データが少なく、父親から実際に話を聞くことはできなかったため仮説にすぎないが、これらの父親はコミュニケーションを取りたい気持ちはあるものの、現実的には家族とのコミュニケーションが希薄化しているのかもしれない。

アンケートではコミュニケーションを取れない理由として、仕事が忙しいと回答している父親が多くいた。少数ではあるが、子どもも子どもなりに忙しい日々を送っていることや、妻と子どもとの密接な関係の中に入りにくいと感じていることを挙げていた父親もいた。仕事に多くの時間を費やしているため、父親は家庭での時間を持ちにくいことがわかる。また、休日でも時間ができたとしても、あまり接することのない子どもとどのように関わってよいかわからない父親も居るようである。

序章でも述べたが、社会からの規制や外的な拘束が弱くなった現代において、家庭の在り方、親の役割については各家庭の判断に委ねられている。父親自身が“父親モデル”を見出していく必要がある。調査結果を見ると、自分自身で父親モデルを見出している父親、自分自身の親をモデルとしている父親、模索中の父親など各家庭でばらつきがみられたが、それぞれの家庭の形にあった父親が多くいる事がわかった。社会からの強制力が弱くとも、それぞれ自分なりの父親モデルを持ち、子育てに参加しようと努力している。

アンケートの自由記述には書いていなかったが、アンケートに協力して頂いた父親から後日、「幼児教育無償化や待機児童解消など、大人にとって必要な政治はかりで、子供と過ごす時間をとり

たくても実際は取れない」という意見があった。父親が育児に積極的に参加するには、個人の努力と共に、政治や企業など、大きな集合体が大きく変化し、男女問わず育児を担える社会環境が整うことも必要不可欠である。また、庭野の指摘しているように、「働きながら育児をする父親モデル」に出会うことで、徐々に育児に参加できるのではないか。現代では“目指せ！家事男(カジダン)”“クイズ感覚で家事の知識を学ぶ”など、気軽に参加しやすい父親向けの教室も徐々に増え始めている。このような教室に参加し、育児に関する知識を得つつ他の父親と意見を交わすことで、父親が更に育児に参加しやすくなるのではないか。幼い頃から育児に関わる事で、その後も子どもとの関わりを持ち続けやすいのではないかと推測する。

育児や家事を夫婦で分担することで、女性の社会進出の推進、虐待防止、男性の仕事以外での居場所を作るなど様々な良い効果が得られる。家庭を顧みず仕事に打ち込んでいた父親が、社会の変化から今一度自分の家庭に目を向け、“家族”について考えるきっかけになる事を望んでいる。

## 今後の課題

今回の調査では、被験者の人数が少なく、現代の父親についての全体的な検討は行えなかった。また、第三者を通して調査協力を行ったため、被験者と直接会う機会がなかった事により、教示がうまく行えなかった。父親の家族関係や子どもとの関係の真意についても把握しきれなかった。今回はアンケート調査と描画用紙を配布したが、可能であれば父親と対面して描画を行い、描画している様子や描いた後の感想について意見を求める方がより多くの情報を得られるであろう。

さらにアンケート調査で、父親の年齢や仕事内容、子どもの年齢について問う事により、年齢や仕事内容が父と子の関係にどのような影響を与えるのかについても検討できると考える。

K-F-Dを用いた先行研究は少なく、その多くは子どもに実施されたものであり、解釈についても子どもの発達と関連した解釈や、子どもの視点からの解釈が多い。それが大人にそのまま適応できるかという点、疑問が残る。今後、父親にも

K-F-D を実施し、より多くの研究がなされることで、大人の描画にみられる特徴、父親にみられる特徴などがわかり、また別の視点からの解釈も生まれるのではない。

また、今回の調査を依頼した際、絵を描くことに抵抗感を覚える父親が多かった。そのため予定よりも協力を得られず、データが少なくなった。子どもは“遊び”として絵を描くことを楽しんでいるが、大人になるとそうではないことも多い。K-F-D は家族が“何かしているところ”を描かせることにより得られる情報も多くなるが、大人にとっての取り組みの難しさも増す。多くの父親に K-F-D を実施し、結果を検討したい場合、断られることが多いことや検査に抵抗感を示す人が多いことを念頭に置くことが大切であると考え。そのような点も含め、K-F-D に限らずどのような形であれば父親からの研究への協力が得られやすいかを合わせて考えていく必要があるだろう。

## 謝 辞

本論文を執筆するにあたってご指導頂きました京都学園大学人間文化学部心理学科橋本尚子准教授、調査に協力して下さった放課後デイサービスのスタッフのみなさん、ご家族の方々に深く感謝を申し上げます。

## 引用・参考文献

- 独立行政法人 労働政策研究・研究機構 早わかり  
グラフでみる長期労働統計  
図 12 専業主婦世帯と共働き世帯 <http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0212.html> 2017 年 12 月 12 日 取得
- 厚生労働省 イクメンプロジェクト <https://ikumen-project.mhlw.go.jp/project/about/> 2017 年 12 月 15 日 閲覧
- 小崎恭弘 家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援：少子化対策の切り札 2017 年 10 月 10 日第 1 刷発行 ミネルヴァ書房
- 総務省統計局 平成 28 年社会生活基本調査 生活行動に関する結果 結果の概要  
表 4 - 36 歳未満の子供を持つ夫・妻の家事関連  
時間の推移（平成 8 年～ 28 年）－週全体、  
夫婦と子供の世帯 <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf> 2017 年  
12 月 15 日 閲覧
- 厚生労働省 平成 28 年度雇用均等基本調査の結果概要 P14 イ育児休業者割合 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-28r-07.pdf> 2017 年 12 月 17 日 取得
- 株式会社博報堂 生活定点 <http://seikatsusoken.jp/teiten/chart/900.html> 2017 年 10 月 3 日閲覧
- 市川緑（2005）動的家族画の分析—小学生の家族イメージについて—  
大阪経大論集 第 56 巻第 1 号
- 日比裕泰 動的家族描画法（K-F-D）—家族画による人格理解—1986 年 4 月 30 日第 1 刷発行  
ナカニシヤ出版
- 江幡綾子・吉田昭久（2000）子どもの絵に見られる家庭内コミュニケーションの実態と心理的課題—動的家族画テスト（KFD）を通して—  
茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）49 号 p95～115
- 加藤孝正 臨床心理学研究 I 動的家族画（KFD）  
P87～104 1986 年 9 月 15 日発行 金剛出版
- 深谷野亜（1995）父親像の希薄さに関する考察—  
東京と台北との比較— 子ども社会研究 創刊号  
*Journal of Child Study, Vol. 1, June* P54-56
- 青井和夫 家族とは何か 1974 年 9 月 26 日第 1  
刷発行 講談社 P131
- 蛭田由美（2000）父性研究の変遷と課題 藍野  
学院紀要 第 14 巻 P10～16
- 河合俊雄・田中康裕 発達の非定型化と心理療法  
2016 年 10 月 10 日第 1 版発行 創元社
- 井上忠司 「家庭」という風景 1988 年発行 日本  
放送出版協会
- 工藤保則 他 <オトコの育児>の社会学—家族  
をめぐる喜びととまどい— 2016 年 5 月 30 日  
初版第 1 版発行 ミネルヴァ書房
- 庭野晃子（2007）父親が子どもの「世話役割」  
へ移行する過程—役割と意識との関係から—  
家族社会学研究 第 18 巻第 2 号 P103～114
- O'Brien, R.P. & Patton, W.F. (1974),  
Development of an objective scoring method  
for the kinetic family drawing. *J.Person.*



Assess., 38 : 156-164

- 日比裕康 (1973) K-F-D の研究 (1) ——その紹介と登校拒否の場合——  
日本心理学会 第 37 回大会発表論文集、318 - 319.
- 日比裕康 (1974 a) K-F-D の研究 (2) ——描画に投影される自我発達過程——日本心理学会 第 38 回大会発表論文集、494-495
- 日比裕康 (1974 b) 動的家族描画法 (K-F-D) の研究 I ——その紹介と理論的基礎——滋賀女子短期大学研究紀要、II、79-113
- 清水俊子 (1974) 動的家族描画法 (K-F-D) について——動的家族描画法の本邦における追試とその解釈的意義の理解——滋賀女子短期大学研究生過程<児童心理学> 修了論文
- Burns, R.C.&Kaufman, S. H. (1972), Actions, styles and symbols in kinetic family drawings (K-F-D) : *An interpretative manual*. Brunner/Mazel. [加藤孝正・伊倉日出一・久保義和 訳 (1975) 子どもの家族画診断 黎明書房]
- 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和 (1976) 動的家族描画法のスタイルに関する研究 芸術療法、7 : 63-71.
- 加藤孝正・清水敏子 (1977) 動的家族画と家族像への態度との関連性 芸術療法、8 : 33-38.
- 加藤孝正・清水敏子 (1978) 動的家族描画における行為と家族像への態度 芸術療法、9 : 25-32.
- 石川元 (1982) 家族描画の治療的效果——思春期症例を中心に——精神神経学雑誌、84、9 : 680-705.
- 石川元 家族絵画療法 1983 年出版 海鳴社
- 内閣府男女共同参画局 地方自治体における取組紹介 [http://www.gender.go.jp/policy/men\\_danjo/municipality/effortsinq.html](http://www.gender.go.jp/policy/men_danjo/municipality/effortsinq.html)  
2017 年 12 月 30 日 閲覧